

(資料)

大川市立清力美術館の江戸勤番之図

小* 林 法 子

ここにとりあげる江戸勤番之図一巻(図1)は、筑後国久留米藩主の参勤交代に随行して江戸へ赴き、数年のあいだ江戸に滞在した藩士たちの日常の気散じのようすを、久留米藩御抱え絵師三谷家の、第一分家第六代狩野勝波がえがいた画卷である。明治時



図1

代に三谷家から姻戚中村家につたわり(註一)、現在は大川市の所蔵となり、大川市立清力美術館に保管、展示されている。以下、本稿では清力美術館本と称す。

この清力美術館本とは同じ図様の作品が江戸東京博物館に所蔵されている。江戸東京博物館所蔵の久留米藩士江戸勤番長屋絵巻と題する作品は、その絵の部分十三場面すべてが「東京人」第八八号に掲載され、そのほか『参勤交代』、

「週間朝日百科 世界の文学」、『幕末単身赴任 下級武士の食日記』に参考図版としてもちいられ（註二）、比較的ひろく知られている。

これに対して、清力美術館本は、昭和五十五年（一九八〇）の久留米市教育委員会による博物館資料調査によって確認され、その報告書『久留米藩御用絵師絵画資料目録』に収録、図版三面が掲載され（註三）、そのうち、絵の一場面が『久留米市史』第二巻に参考図版としておさめられ、また福岡県立美術館の特別展において展示されたが、その図録『御用絵師』には、絵の二場面が掲載され、簡単な解説が付されるにすぎない（註四）。本稿は、この清力美術館本の全体を紹介するものである。

なお、銘文において、判読できない文字は□でかこみ、割書部分は▽△で示した。／は原文の改行を示す。

一、品質・法量

紙本著色、墨書

見返し 天地 二六・三糎 長さ 第一紙 八・五糎 第二紙 一六・三糎

本紙 天地 二六・三糎

長さ 第一紙（序） 三七・七糎

第二紙（序） 三九・二糎

第三紙（序） 三三・七糎

第 四紙（絵）	三一・七 糶
第 五紙（絵）	七・一 糶
第 六紙（白紙）	八・七 糶
第 七紙（絵）	三九・〇 糶
第 八紙（白紙）	九・二 糶
第 九紙（絵）	三八・八 糶
第一〇紙（詞）	八・〇 糶
第一一紙（絵）	三八・六 糶
第一二紙（詞）	一八・五 糶
第一三紙（絵）	三八・七 糶
第一四紙（詞）	一一・八 糶
第一五紙（絵）	三八・五 糶
第一六紙（詞）	一四・七 糶
第一七紙（絵）	三八・七 糶
第一八紙（白紙）	一七・五 糶
第一九紙（絵）	三八・五 糶

第二〇紙（白紙） 一〇・〇糎

第二一紙（絵） 三八・三糎

第二二紙（白紙） 七・六糎

第二三紙（絵） 三八・〇糎

第二四紙（詞） 八・四糎

第二五紙（絵） 三九・二糎

第二六紙（白紙） 九・九糎

第二七紙（絵） 三八・四糎

第二八紙（詞） 九・〇糎

第二九紙（絵） 三八・八糎

第三〇紙（絵） 五・二糎

奥付 長さ
貼紙 五枚

一、第九紙の貼紙（絵） 天地 二六・三糎 長さ（最大）二〇・五糎

二、第一一紙の貼紙（絵） 天地 二六・三糎 長さ（最大）一六・〇糎

三、第一七紙の貼紙一（絵） 天地（最大） 一四・〇糎 長さ 一二・五糎

四、第一七紙の貼紙二（絵） 天地 一二・三糎 長さ 一三・七糎

五、第一九紙の貼紙（絵） 天地（最大） 一三・五糎 長さ

七・八糎

二、銘文

外題（貼紙墨書）「江戸勤番之図」

付箋一（朱色貼紙墨書）「序文戸田熊次郎 旧久留米藩の目付役たり／和漢の学ニ通し詩類／を能くす其子勘吉其孫成年皆博学ニ／して名声あり」

序文

「康節老の安楽寓にはあらず長明法

師の方丈にもあらず田舎間の六畳敷

は是勤番の萍寓なり其萍寓の

うちにも花鳥風月四季おりおりの楽ミ

おのつから^そなさり^{やむ}にまされる

棋将棋に永日を忘れ茶のゆの釜の

しん／＼とにえたつに^麗山のむかしを思ひ

五尺の庭に松竹^を植て北[□]の[□]と称し

大川市立清力美術館の江戸勤番之図（小林）

一一・二三

小舜を破垣に這せて盛久しき秋を賞し

七歩下りの一盃に盧生か榮華の

夢をむさほり朝寝してもきやアきやア／＼

の児の泣声に眼を驚すことなく夜歩行

するとねたみ顔の妻もゐる時は

表長屋の格子より顔はかり外出すれば赤羽

橋よりたち津とひてゑい／＼つら／＼の

声たゆる時なくけはひたてたる

女の行かふハ吉野龍田の色を争ひ

菊麝のかせは鼻を穿ちおほい

川のにきはしきいふはかりなし又

あるときは蕉翁の跡を尋て

かれをのれの肺肝を推き天馬

やの扇状封の四五枚をあらそふ

こと勤番の一興なりされは六畳

敷の萍寓はかの安楽寓にも

をさくおとるましきに画さる

をこつゝゑに志て古郷人にも

しめしかつはやつかれの昔語り

の一助ともなしてむと物しはへる

はゆゝしきわさといさゞしくて

たらぬことを書つくるも勤

番のゑせものになむ

」

付箋二（唐草文朱色貼紙墨書）「画狩野勝波方信凌雲斎筆」

〔絵一〕

画中墨書（火鉢の箱の側面）「中島」

付箋三（白紙部分に貼紙墨書）「▽外科医△中島文叔▽中島百枝ノ祖父ナリ△矢ノ羽ノ紋ハ高原乙次郎」

付箋四（白紙部分に貼紙墨書）「此勤番長屋を田楽と称すそは家屋ノ東西ニ面し朝日夕日向脊を照らし炎熟ニノ堪す豆腐ニでんかく焼ありこれと相ノ類す故ニこの異名あり当時の勤労ノ思はさるへけむや」

〔絵二〕

画中墨書（机の側面）「中島文叔」

〔絵三〕

大川市立清力美術館の江戸勤番之図（小林）

一二六五

付箋五 (唐草文朱色貼紙墨書) 「黒岩ハ▽医師△隆琢ト称ス」

画中墨書 (柱) 「黒岩硯見」

同 (文机の脚) 「戸田」

貼紙一 (絵三に貼る)

画中白字書 (柱隠) 「家村」


画中墨書 (木札) 「戸田熊次郎／人札」

同 (壁貼付の墨書) 「霽風／光月／広川書」

同 (同) 「陽和従／此布／万物尽／光輝」

詞一 (紙本墨書)

「官興々日正長爾眠有夢傲

閒身又作一般興專得牽

牛契牆  滄洲」白文方印二顆

引首印「跳王」(白文長方印)

〔絵四〕

画中墨書 (行灯向かって右側面) 「酒肴坊主／て／花かたな」

同 (行灯向かって左側面) 「北坂を／見て／す、しかる／御堂哉」

同 (机側面)「高園乙」

同 (徳利側面)「八五」

貼紙二(絵四に貼る)

画中墨書(庭側鴨居の棚におく瓶の側面)「桐葉」

詞二(紙本墨書)

「先たのむ椎の木もありとは幻住菴の秀言也我庵に頼むへき

木とてハなければとも五尺忒間の庭面ニ小石をひろひあわひさゝ

ひの壳(ツツ)をあつめて海浜の形を模しさゝやかなる木を植てハ

深山の姿と詠め朝暮水をそゝき帚を取ては七步過の

一盃を傾くるたすけとなせり六畳敷の荒壁にハ凌雲殿

の画書る大船東風に真帆かけて万里の波濤を凌ぎ

わか古郷へ帰る勢ひあるは是も帰るのゑんきならんかと

おもふうちに三とせの秋もちかく成ぬ嗚呼日の永き事

と筆を捨て枕によれば跡はしらす

冷し麦亭主裸に成にけり

「橘雨」

〔絵五〕

大川市立清力美術館の江戸勤番之図(小林)

一二六七

詞三（紙本墨書）上方

「楽と成り苦と成り酒と成盤将と成謡と成り

歌と成るも勤番の有様なれは空言の日暮も

始り或時ハ古句を云ふとと決められたる

顔もあり或ハ一ひんの主に_をと肩ふし

を高なし低ふなすも席に言れし

年玉の扇書_圖袋のあらそひなり

親と子の嘶涼しふ聞へけり 彩雨

来た坂を見て涼しかる御堂かな 橘雨」

同（同） 下方

「心すゝみ焼灯けして

更にけり

琴凌

涼しさや我門よりも

人のかと

残屋

くしき碗の炉辺ニ似合にたるも勤番の一興ならん歟

いづくも結構な御茶御膳ハ何方て御さりますハイ森江にこさり升

御銘ハ初昔なとゝても申ますか御鑑定の通りにこさります御軸も数幅

拝見いたしましたか就中臘月の御軸いかにも面白くどにて凌雲

翁の御仕立ゆへサヨサ近頃ハ鳳朗もなかなかむまぐやりますサテ御

嘶斗り数服の御手前ちと御替り申ませふ

〔絵七〕

画中墨書（書箱側面）「雑書」

同（壁貼付の書）「醉／臥沙場／君慈笑／戊子初冬／林朝書」

同（壁貼付の書）「静幽一長／嘯碧雲／過於峯／乙亥仲春／林朝書」

同（壁貼付の書）「鷹／揚／頼書」

同（櫃側面）「久留米書太」久留米書

同（長押上方）「二階より増上寺／見ゆる」

同（窓外の板塀）「請書」

貼紙三・四（絵七に貼る）

画中墨書（長押上方貼紙の書）「寂／素書」

付箋八（白紙部分に朱色貼紙墨書）「梯豊太▽久留米藩の目付役たり△ 浅田達二兄弟とも／書を能くす豊太は今の梯新平の祖父／なり」

付箋九（白紙部分に朱色貼紙墨書）「高原信太は性質朴ニして能く飲む三坪の部／屋ニまかりたる畳を敷き四ヶ年の永き月日を／過したりと云ふ賢斎は平木碩斎の弟ニして／医を業とす当時遊学中なりしとぞ」

〔絵八〕

画中墨書（畳上の巻紙）「高原信太」

同（窓下方の壁）「賢斎二階窓より定居之内ヲ／覗き見ル」

貼紙五（絵八に貼る）

〔絵九〕

画中墨書「獅はとこ／ちやしなとこちや」

同（徳利側面）「△万」

〔絵一〇〕

画中墨書「羅漢さん／＼／老人りの羅かん／さんな／とふして／＼／して／こふなさる」

詞五（紙本墨書）

「御差留ニて

いづれも／＼大出来之図

大川市立清力美術館の江戸勤番之図（小林）

年号交張にて知るへし

〔絵一一〕

画中墨書（壁貼付紙）「升力」

同 （壁貼付紙）「天保」「十」「年」「亥」「四月」「五日」「夜」

同 （文机脚部）「高」「乙」

同 （破られた紙片）「人足帳」

付箋一〇（白紙部分に朱色貼紙墨書）「旧諸候の江戸ニ参勤せしや隔年ニして一年ハ／江戸ニあり又一年ハ勤国ニあり爾るに幕府の／靈屋上野芝両寺の火の番等を諸候ニ命す／れハ藩主在江戸永くなり藩士の勤番も四／五年ニ涉ることあり天保十年四月ハ大良公御／帰国の年にて幕府か暇乞の登城ありて／在江戸を命せられたり故ニ從駕の藩士も／更ニ壹両年を経過せされハ父母妻子と／相見るを得すこの暴飲をなし不平の旅／鬱を發せしと聞けり云ふ」

〔絵一二〕

詞六（紙本墨書）

「烈暑暮方より涼之門口之図」

〔絵一三〕

画中墨書（表札）「梯豊太」「狩野勝波」「上部かかず」島文叔「御目附長屋」

同 （狩野勝波が手にする団扇）「人の門／我門と／なく／涼みけり」

同 (歩み去る人物の前方)「腹こなしすけん行之処」

付箋一一 (朱色貼紙墨書)「梯豊太」

付箋一二 (朱色貼紙墨書)「狩野勝波」

付箋一三 (朱色貼紙墨書)「中島文叔」

付箋一四 (朱色貼紙墨書)「戸田熊次郎」

剥落の付箋 (唐草文朱色紙墨書)

一、「橘雨ハ▽高原乙次郎ノ号△」

二、「武藤弥兵衛▽武藤徳蔵ノ父△」

序文 (図2) に落款などはないが、序文冒頭に貼られた付箋一 (図2) に戸田熊次郎の序文であると記す。現在のところ、比較対象は、久留米市立図書館蔵有馬家文書の、戸田熊次郎のものとしてされる「江戸勤番控」(註五) 一点である。この「江戸勤番控」が戸田熊次郎の真筆であるとしても、小横帳に漢文で記された記録とやや装飾的な仮名交じりの序文とでは比較は容易ではない。一見するかぎりでは異筆にもみえるが、文字によっては似通った筆癖も認められる。序文を戸田熊次郎とする付箋の記述を否定する積極的根拠はみいだせない。

詞一 (図5) は滄洲すなわち戸田熊次郎 (註六) の落款をもつ漢詩を記すが、この筆跡は序文と同筆と認められる。このほかの大川市立清力美術館の江戸勤番之図 (小林)



図20 剥落の付箋

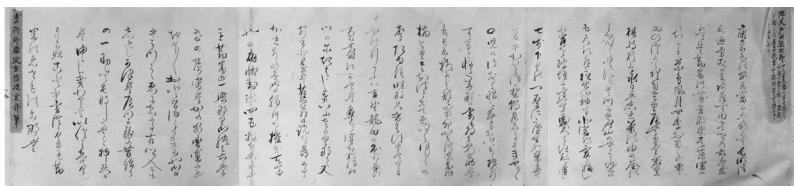


図2 序・付箋一・二

詞書は、詞三(図9)と詞四(図10)は同筆の可能性がたかく、詞五(図17)と詞六(図19)は同筆、詞一はこれらとはことなる。画中の文字は一筆であり、詞三、四と類似するが、同筆と断定はできない。詞二(図7)の筆者は、作文の主と想定される橘雨、付箋六によれば高原乙次郎という人物であろうか。

序文にそえる付箋をはじめとして、剥落しているものをふくめて、十六枚の付箋がある。付箋と称するには法量の大きな紙もあるが、清力美術館本には絵をえがいて貼りつけた紙もあるため、本稿では文字を記して貼るものはすべて付箋と称している。

付箋の料紙には、朱色の無地と、朱地に朱線で唐草文様をあらわす二種類がある。無地の付箋の数が多く、後者は付箋二(図2)、三(図3)、五(図5)と、現在剥落している一枚(図20)で、人名と、別号、家系などをきわめて簡単に記す。料紙はことなるが、付箋の筆跡はすべて同一である。付箋一と同様に、絵師を狩野勝波とする付箋二をふくめて、付箋の記載内容は容認したい。

この付箋の筆者は、たとえば付箋一において、戸田熊次郎の子や孫の博学に言及し、付箋八においても梯豊太は今の梯新平の祖父と述べることから、清力美術館本の登場人物の孫の時代に生きた人物であることがわかる。付箋一に旧久留米藩と記すことから、この付箋は廃藩置県後につくられたと推察される。

また、江戸東京博物館の久留米藩士江戸勤番長屋絵巻によって、現在剥落している付箋の一、橘雨の付箋は詞三の末尾に、もう一枚の武藤弥兵衛の付箋は巻末の外出する人物の前に貼られていたことがわかる。

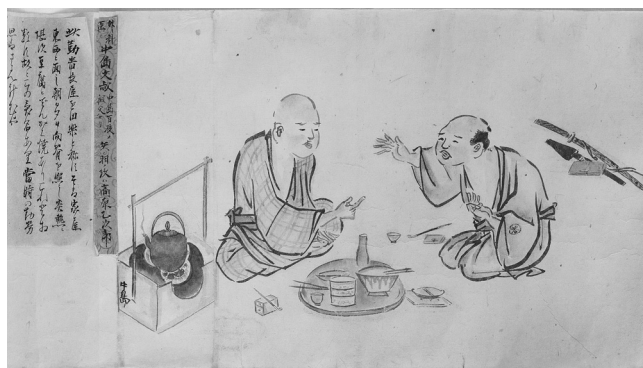


図3 絵一・付箋三・四

三、絵

絵一(図3)

ふたりの人物が、徳利や鉢をのせた盆をはさんで対座するところをえがく。付箋三によると、むかつて右、矢の羽の紋の小袖をつけた人物は高原乙次郎、左は外科医中島文叔である。文叔の脇におかれた火鉢の箱の墨書から、ここが中島文叔の部屋であることもわかる。

文叔は剃髪し、乙次郎は月代を剃って小さな髻を結っている。文叔は青色の格子模様、乙次郎の小袖は無地、小袖に家紋をえがくのはこの場面のみ。ふたりの脇にはそれぞれの煙管と煙草入れ、乙次郎の後方には大小の刀と紙入れをえがく。ふたりは、左手の指を折り、右手をさしだしており、ほろ酔い気分で拳遊びにでも興じているようである。

火鉢の炭は墨のうえに赤色をほどこし、火鉢にかけた大きな鉄瓶の口からは湯気がたちちのぼっているようすを淡墨でえがいている。

ここも中島文叔の部屋であることが、机側面の墨書によって示される。大きな机、書物をつみあげた部屋はいかにも狭苦しい。そこに人物は三人。鬘を結った人物と剃髪の人物が格子に線をひいた盤をはさんで、いずれも片膝をたてて坐し、もうひとりの剃髪の人物は煙管をもって腹這いになり、かれらの方をみている。盤上には碁石も駒もえがかないが、序文には棋将棋に永日を忘れとある。

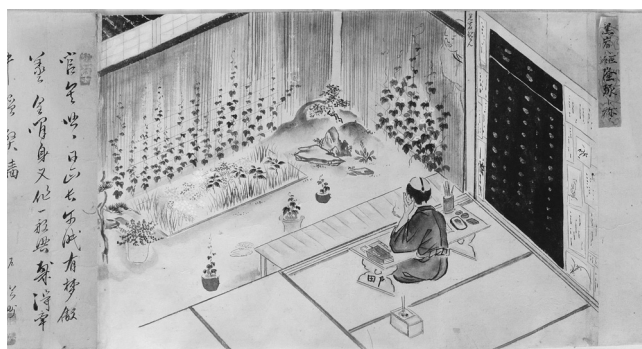


図4 絵二

剃髪の人物のどちらが部屋の主中島文叔かはわからない。清力美術館本では、文叔のほか、のちに登場する医師黒岩隆琢と絵師狩野勝波が剃髪している。着衣は、坐すふたりが無地であるのに対して、腹這いの人物は白地に青の縋模様、夏の衣かとおもわれる。

壁は板壁、すくなくとも一面は上方が格子となっており、そこに簾をかけている。その脇の柱には花をいけた小さな花入れをかけ、この柱に接するのは簡素な床の間か、低い台をしつらえて、そのうえに紐をかけた大きな手文庫と書物をおいている。その上方には懸物の表具の一部がえがかれている。

腹這いの人物の足元に机があり、硯と墨、筆立、冊子などをならべおく。机の前には楕円形の虎皮。人物の脇に煙管と煙草入れ、煙草盆、急須をのせた盆。湯のみ茶碗や大小の刀も畳のうえに無造作におかれている。



(上) 図5・(下) 図6 絵三・詞一・付箋五

絵三(図5・6)

戸田熊次郎の部屋。文机脚部の墨書によってそれとわかる。熊次郎は背をみせてえがかれている。かれは濡れ縁ちかくに文机をおいて、これに頬杖をつき、煙管をもった手を休め、ぼんやりと庭をながめる風情にえがかれる。かれの後方に、火のはいった小さな手焙りがある。壁には、画賛のある岩に竹をえがく懸物一幅、そのほか小画面の書画がさまざまな貼りつけられている。左手の壁の端に、吊りさげた帚とはたきもえがかれる。濡れ縁のさきには小さい庭があり、右手には朝顔のからんだ垣根があり、垣間みる人物の上半身がえがかれる。この人物は、柱の部分の墨書と付箋五によって黒岩隆琢とわかる。

熊次郎の左手の壁をえがく紙を巻きあげると、庭の全体をみることができ(図6)。朝顔は熊次郎の前面の垣根にもからんでおり、別に植木鉢にも育てている。庭の真中に長方形の花壇もあり、花と野菜をまじえ植えているらしく、撫子のような赤、白、桃色の花が咲き、茄子のひと株は実をつけている。花壇の右手には小さいながら築山風に土を盛り、岩を配して木や草を植えている。

大川市立清力美術館の江戸勤番之図(小林)

一二七七

一方の垣根越しに隣接する軒先がえがかれることによって敷地の狭さをおもわせるが、それがかえて熊次郎の庭につくりだされている景色のひろさを感じさせる。

庭全体の描写は、序文において江戸の萍寓の楽しみを列挙するなかの、朝顔を破垣に這わせて云々という件に対応する。この画面につづく詞一(図5)には、朝顔に無聊をなぐさめるといふ熊次郎自作の漢詩が記されている。

絵四(図7・8)

文机側面の墨書から高原乙次郎の部屋。ここに憩う三人をえがく。夜陰せまるころか、行灯には灯がともる。すでに空になった大徳利が一本。ひとり行灯の縁を枕に横になり、剃髪の人物が徳利をさしだし、もうひとりが大きな

盃でうけている。

画面むかって右手の壁には、二段の棚があって文房具をならべ置き、もう一方の壁には船の白帆が大きくえがかれ、この壁の端には月をみあげる布袋の図の懸物をかける。白帆は凌雲こと狩野勝波筆、帰郷のおもいを託した大船の帆と、詞一(図7)にいう。



(上) 図7・(下) 図8 絵四・詞二

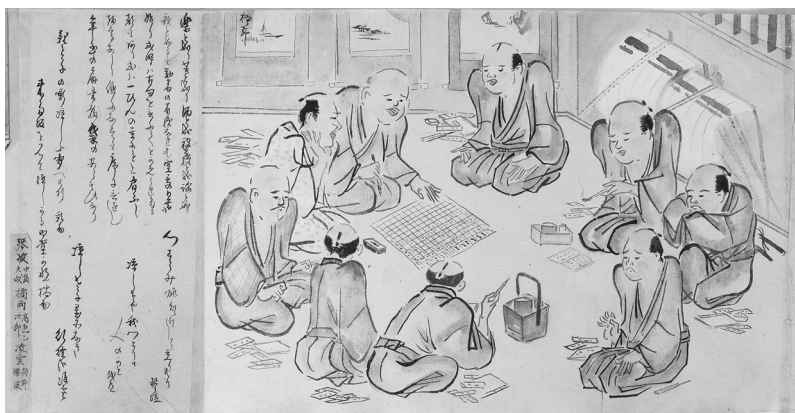


図9 絵五・詞三

絵五 (図9)

行灯の一面には撫子らしい花をえがき、他の二面には発句を書く。その一「きた坂を」は、詞三 (図9) によって、橘雨こと乙次郎そのひとの句であるとわかる。この句の墨書は行灯の内側からみているために、裏文字で記されている。

濡れ縁のさきは庭。棚のある壁と鴨居上方の棚をえがく部分を巻きあげると、庭がひろくあらわれる (図8)。戸田熊次郎の庭とはことなり、花のない、樹木だけの庭である。樹木の根元の地面もなめらかではなく、墨線の楕円形でうめられている。詞二に、樹木を深山になぞらえ、小石やあわび、さざえの貝殻を敷いて、海浜の形を模したとある。

点取り俳諧のようすをえがく (註七)。部屋の一方は、上方が窓らしく、下方は壁、この壁面に白帆がえがかれている。これに隣接する画のない壁には水墨山水図三幅対をかける。むかって左端の幅には、落款にしてはやや大きく「狩野」と墨書する。壁面の白帆の図様は高原乙次郎の部屋のそれとはことなる。後出の詞四 (図10) からすると、狩野勝波の部屋にも、荒壁に胡粉にて帆懸船がえがかれていた。ここは勝波の部屋である可能性がたかい。

会するは九人、一覧表を前に筆をとるひと、煙管をもつ手を止め目を閉じるもの、両の拳を膝に押しつけるもの、指を折るもの、腕組みするものなど、思案中の連衆をえがく。各々の脇には、冊子と複数の短冊形の紙片が無造作におかれている。序文にも、芭蕉翁の跡をたずね、点取り俳諧に興ずることも勤番の楽しみの一と述べている。



図 10 絵六・詞四

絵六(図 10)

茶の湯の場面である。部屋のなかほどに炬をきった部屋。壁には、朱房を垂らした扇をかざる柱の左右に寿老人鶴亀図三幅対、川上白、田川鳳朗、大綱宗彦など、狩野勝波等とは同時代人の墨蹟などをかけならべ、押し込みの戸には旭に白梅図をえがき、その上方には鶴らしい群をなして飛ぶ鳥の図の額をかかげる。清力美術館本のなかでもっとも華やかな場面で、常の茶会ではなく、初釜かとも想像される。

文机側面の墨書から、勝波の部屋と推察され、画中の付箋によって茶を点てるのが勝波とわかる。亭主勝波の左手に棚があり、水指をおく。側の棗のうえに茶杓、その横に茶筌がつかれ、勝波は茶碗を手にとり、茶巾で拭いている。客は三名。みな羽織を着け、脇差もみえない。剃髪のひとり葉子を手にとり、ほかのふたりはややかしまった面持ちで正座している。やりとりは詞四にくわしい。

序文に茶の湯の釜のしんしんと煮えたつにとあるように、蓋をとった釜からはたかく湯気

がたちのぼっている。

絵七（図 11・12）

櫃の名札から梯豊太の部屋とわかる。室内には対座するふたり、煙管を手には、話に聞きいるようすの人物が豊太であろう。もう



（上）図 11・（下）図 12 絵七・付箋八

ひとりとは、袴を着け、脇に小刀をおき、膝前にひらげた巻紙を指さしつつ話す態。豊太の脇にある箱は煙草盆らしい。客は煙管や煙草入れを畳のうえに置いてある。かれの側にある小さな壺形には、火ばしをさすらしく、煙草用の手焙りか。

窓の上下の壁には、二大字や漢詩の墨書が未表装のままで貼られている。別の壁には書跡や短冊を貼った懸物がある。梯豊太は、付箋八（図 11）に書能くすとのある。書のみをかざり、画や画の懸物がみられないのはそのためであらうか。また、柱には扇、その下方に花をいけた一輪挿し。一方の壁際には文机、他方には書箱、小ぶりの櫃をならべおく。その

櫃には、文机と同じく朱色の布をかけ、冊子をつむ。ほかに、名札をつけた大きな櫃のうえには香炉をかざっている。

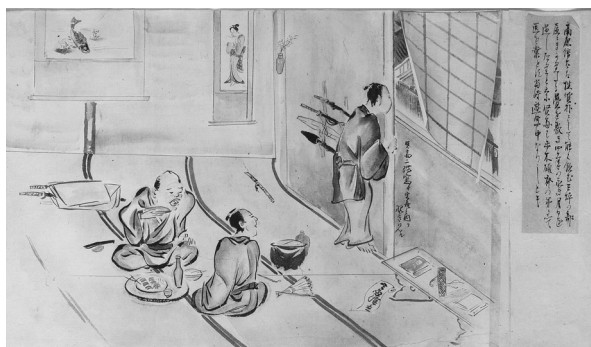
窓の部分の紙をまきあげると、この部屋が二階であることがわかる(図12)。一方の窓からは隣接する長屋、他方の窓からは、長屋の屋根越しに遠くの四脚門と門前のひとびと、木立がみえる。木立にたなびく霞の端に、月とほととぎすらしい一羽の飛鳥をえがく。壁面の墨書には、二階から増上寺がみえるとする。

久留米藩は、寛文二年(一六六二)十一月、徳川幕府より芝三田に屋敷地を拝領し(註八)、上屋敷とした。赤羽川沿いの土地で、屋敷地の北面にそって東へすすむと、屋敷地がおわってほどなく、序文にも言及する赤羽橋があり、これを渡ると、右手に増上寺の広大な境内がひろがっている(註九)。この上屋敷は、文久三年(一八六三)頃に撮影された写真(註一〇)や、泥絵(註一一)、錦絵(註一二)にもみいだされる。清力美術館本の舞台は、これらにみえる延々とつづく表長屋にかこまれたこの上屋敷のうちにあった。

絵八(図13・14)

文机から転がりおちたらしい巻紙に記された名から、高原信太の部屋をえがくとわかる。床より大きな畳をもちいたのか、畳は壁際でもちあがるようにまがっている。付箋九(図13)によると、高原信太は三坪の部屋にまがった畳を敷いて四年をすごしたとある。

部屋のなかほどに徳利や肴の皿をのせた盆をはさんですわるふたりと、窓際にたつ人物がいる。すわるふたりは窓際の人物が気にかかるようすで、かれをみやる。付箋九に性質朴にしてよく飲むと記される高原信太が、大盃を口に運んでいる人物であろう。



(上) 図 13・(下) 図 14 絵八・付箋九

薄物の羽織をつけた窓際の人物は、壁面の墨書から遊学中の医師賢斎、柱にすがり窓外をみつめる。信太の開き加減の口許は、酔いにまかせて、賢斎に意見しているようにみえる。

貼紙をまきあげ、明障子の窓をあけると、みおろすようにとなりの長屋の庭さきが見える(図 14)。

壁面の墨書によると、定居の長屋。庭にはふたりの女性をえがく。ふたりのしぐさは、お裾分けを持参した近所の女性と、恐縮するこの家の妻女と想像させる。家族からとおくはなれてくらす藩士には、望郷のおもいをかきたてられる光景であろう。

をかけ、一輪挿しをかざる柱をはさんだ壁には文をもつ美人の図と藻魚図の懸物をかけている。



図 16 絵一〇

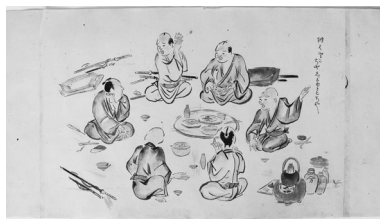


図 15 絵九

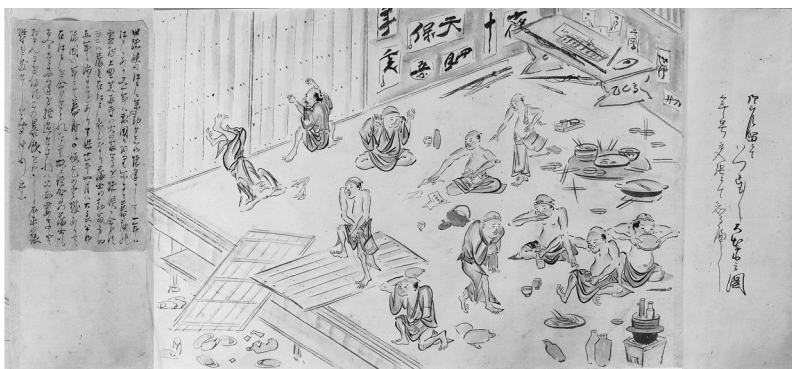


図 17 絵一一・詞五・付箋一〇

絵九 (図 15)

獅子はどこじゃに興じる六人。袴を脱いで、大小を脇において、酒肴をかこみ、身振り手振りもさまざまにえがかれる。畳や調度もえがかない。

絵一〇 (図 16)

羅漢まわしに興じる十人。

羅漢まわしは寛政四年(一七九二)序跋『絵本大人游』卷の中に、絵九の獅子はどこじゃは翌年の続篇卷の上に
おさめる(註一三)。

絵一一 (図 17)

酒宴の果ての大混乱をえがく。文机の脚に記す文字は
高原乙次郎をさすが、白帆の荒壁もみえず、絵四の部屋
と同じとおもわれない。

会するは十一名。すでに席は乱れ、大盃でさらに飲み

つづけるもの、人足帳を破りするもの、押し込みの前にすわり、両の拳でその戸を叩くもの、外れた板戸を蹴破らんとするもの、徳利を三和土に投げするもの、迷惑顔に身をちぢめて徳利を運ぶもの。押し込みの戸に逆さにもたれた人物は、押し込みの戸を足でうち鳴らしているらしい。滑稽味ある描写である。

詞五（図17）にしたがい、壁面の文字をたどると、天保十亥年四月五日夜。付箋一〇（図17）にことの経緯が記されている。公的記録でおぎなうと、天保十年（一八三九）当時の藩主は大良公、第九代有馬頼徳、かれは天保九年（一八三八）四月に参勤のた

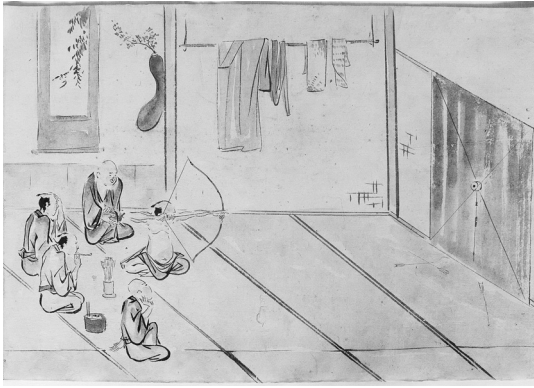


図18 絵一二

め出府した（註一四）。翌十年（一八三九）は帰国の年であったが、四月一日、御暇を乞うために登城すると居残りを命じられた。勤番の藩士たちは、この帰国差留めを知って落胆し、鬱憤をはらすため暴飲にはしたのである。この四月の時点では居残りの理由はあきらかでないが、八月、久留米藩は前年冬に焼失した江戸城西の丸普請の手伝いを命じられている（註一五）。

絵一二（図18）

雀小弓をえがく。出光美術館蔵英一蝶筆四季日待図巻（註一六）にもえがかれる室内での弓遊びである。

だれの部屋かはわからない。これまでの部屋よりややひろい十畳敷程度にえがかれ、一部に壁士の落ちたようすもえがかれる。その壁の一面に小さな的をしつらえている。

的の下方には、三本の矢が散らばっている。別の壁面には、柳に飛燕図らしき懸物をかけ、その脇の柱には黄色の花を挿した大きな糸瓜形の花器をかざり、この柱をさんだ壁面に細い棒を吊して衣桁代わりにもちいている。

ひとりが上半身裸形で弓をひきしぼり、あとの四人は煙管をふかし、頭をさすり、立て膝をするなど、くつろいだようすで見守っている。弓をひく人物の脇の筒には六本の矢がのこり、煙管をつかう人物の脇にはさりげなく小さな手焙りがおかれている。

絵一三（図19）

黒塗りの板塀の前での夕涼みの様をえがく。塀の表札には狩野勝波と梯豊太の名が並び、右隣の表札は中島文叔。

黒塀のうえには三個の植木鉢をならべおく。色もかたちもことなる植木鉢には朝顔を植えるらしいが、それぞれの鉢に名札とおもわれる小さな短冊形の札をさしている。勝波等の住居の門口を左手に、台をしつらえ手水鉢をのせ、手水鉢には柄杓を伏せおく。台の下方には葉蘭のような植物を植えている。また、手水鉢の背後には、赤い実をつけた南天と奥へとつづく飛び石がみえる。南天にも地面にも白色の絵の具をほどこし、雪をあらわす。涼感をもとめた壁画である。

門口の薪の束に腰掛ける狩野勝波、手にする団扇には発句の墨書、体をやや右にむけ、



図19 絵一三・詞六・付箋——から一四

口はひらいており、話しかけるようすである。勝波の左方、丸太に腰掛けるのは梯豊太、月にほととぎす図の団扇を腰にさし、うつむき加減に何か言いつつ、腕の汗を拭う。勝波の右方の中島文叔は、右手に朝顔図の団扇、左手に煙管と煙草入れをもち、ふりむいて、歩みさる人物を見送っている。戸田熊次郎は、夕涼みの仲間入りするところか、左手に団扇をもって御目付長屋と書かれた門をはいるその背中の上半身がえがかれる。

画面左へ歩みさる人物には、さきにふれたように、武藤弥兵衛とする付箋があった。おそらく勝波の問いにこたえた、腹ごなしのためにでかけるところであるということばの墨書で清力美術館本は終わっている。序文にもあるように表長屋から外に出るとほどなく赤羽橋、これを渡ると増上寺、夕まぐれの散策には恰好の場所というべきか。

ここにえがかれる主要な人物は、ほぼ四様の大きさにわけられる。もっとも大きくえがかれるのは、絵一、二、四、五。人物が二、三名の場合と句会の場面で、後者では、人数は九名と多いが、人物は肩がふれそうなほど近接してえがかれる。もっとも小さいのは、絵一一、天保十一年四月五日夜の暴飲の場面で、高い視点から部屋のおちこちに散らばった十一名のようなすをとらえる。これらのなかばの大きさにも二様あり、絵九、一〇の酒席での遊戯はやや大きく、絵三と六、七、八、一二、一三はやや小さい。描写の主眼が、人物か、室内のようすか、庭か、窓外の風景か、人物の大きさは場面によって適切な大きさが撰択されている。人物の大きさが場面によって不規則にかわるため、画卷全体の統一感からするとこれをいささか減少させるが、一方において、これが場面の展開をよりいっそう変化あるものと感じさせている。

人物のえがき方は、大きさにかかわりなくほぼ同じである。それぞれの人物の肉身線は墨線とどぎれがちにひき、額、頬、胸、

手、腕など肉身部分に、ひろく塗るように朱隈をいれている。眉も目も鼻梁線も、ほとんどが、一本の淡墨線をひいたうえに、さらに一本の濃墨線をひきかさねるにすぎない。が、眉や目の線の傾斜角度をかえることによって、巧みにさまざまな表情をえがきわけている。口は、閉じた場合は一本の線、開いている場合は輪郭線で上下の唇をかたどり、そのなかばに二本線をひき、朱をさしてあらわす。簡略ではあるが、舌と前歯をみせてえがくものがあり、酔った人物が大声で管を巻いているような雰囲気もよくあらわされている。

衣文線は、肉身線よりやや濃い墨をもちい、やや太く、速度のある描線で、細部にこだわることなく、しかし的確にかたどっている。ただし、もっとも小さくえがかれる絵一一の場合は、肉身線も衣文線も描線の幅がほかの場面より細いだけでなく、肉身線と衣文線の差異も少なくなっている。

彩色は総じて淡く、緻密には塗らない。たとえば着衣の場合も、淡い色をおよそ全体にほどこし、衣文線にそってやや濃い色を隈のように、ときにはくくりがちかいほどに細くほどこす。ほとんどの着物が寒色系の無地で、色数も多くはないが、組み合わせや配置のために単調ではない。絵一、二、四、五、一三の縞模様や格子模様、縞模様をあらわす線も極く薄くひかれるにすぎないが、単調を破るには十分な効果を發揮している。

一見するかぎりでは速筆による簡略な描写、賦彩も粗である。しかし、火鉢の炭に点じられた朱、鉄瓶の口や茶釜からたちのぼる湯気、煙管の煙など、細部の描写には細心の注意をはらっており、窓からみえる増上寺の門や、庭先の女性のようすなど、きわめて小さくえがかれた部分の描写も的確である。このようなことから、略筆風にみえる描写こそが撰択された表現方法であったとかがえられる。

また、窓外風景の描写には実景に即した遠近表現はみられず、窓枠内に縮小した風景をはめこんでいること、実際に目にした可能性は否定できないにしても、師家木挽町狩野家の祖尚信の禁裡郭公図屏風や英一蝶筆四季日待図巻にならうかのようによとぎすをそえてえがくことなど（註一七）、基本的には伝統的表現にしたがう傾向が顕著である。

四、構成

清力美術館本において、場面のならびに規則性をみいだすことはできない。

時間の経過にそっていないことは、絵一一が天保十年（一八三九）四月五日夜をえがき、絵六が、詞四によって天保十一年（一八四〇）であるらしいことから推察される。

また、季節の推移にしたがうものでもない。各場面の季節の表現はかならずしも明瞭ではない。絵七のほととぎすや絵一三の夕涼みは夏、絵三の朝顔を秋とし、絵六の茶の湯を、室内の華やかさから初釜として春にあて、絵一三の、雪中をえがく壁画に冬をみとめて、四季がそろうとみることも不可能ではないが、たえそうであっても四季の順にはあわない。事柄の生じた前後関係にも、季節の順にも、清力美術館本は束縛されていない。

あえて排列に関する絵師の配慮をうかがうとすれば、室内二場面、庭をふくむ室内二場面、室内二場面、窓外風景をふくむ二階の室内二場面、室内四場面、唯一の屋外となる門口のようす一場面でおわるという、まとまりと変化の両立するならば方が撰択されていると指摘することはできる。

清力美術館本の序文は、勤番長屋の生活が、わずか六畳敷の仮住まいながら、妻子のしがらみをしばし離れて、四季折々に庭をととのえ、茶の湯や将棋や俳諧に暇を過ごし、ときには赤羽橋周辺の賑わいに心をよせる気楽さを述べ、そのような暮らしとささやかな感興を絵にして、故郷のひとに示し、いずれは昔語りの助けともするくわだてと記す。日常の余暇そのままに、おもいつくままに場面をならべたかにおもわれる排列は、序文にいう制作意図にふさわしいものといえよう。

ただし、絵八と絵九の間にもちいる白紙の端に弧線の一部がみられることから、欠落や錯簡の可能性もある。しかし、そのことをあきらかにする手がかりはない。絵の部分と白紙をふくめて詞書にあたる部分は、法量からすると、現状の排列に不自然な点はない。絵と絵の間の白紙部分が、詞書のための余白であるとすれば、清力美術館本が未完、あるいは稿本である可能性もかんがえられる。が、これもたしかめる術はない。それゆえ現状を容認し、無作為にもみえる排列を清力美術館本の特徴としておきたい。

もうひとつの特徴は、本紙を二重に貼ることによって一場面を二様にみせる点にある。このような貼紙は、下絵における図様変更の際にもちいられることがあり、絵師にはなじみ深い手法といえる。しかし、図様が確定してこそ本絵であるから、本来、完成作品にこのような貼紙はそぐわない。

貼紙によってくわえる絵三の戸田熊次郎の庭、絵四の高原乙次郎の庭、絵七の増上寺は、すでにふれたように、いずれも序文や詞書にも言及する。絵八の定府の藩士の住まいを覗きみる場面も、序文や付箋にいう望郷の念、故郷の家族をなつかしむ気持ちにもとづく行為をえがくものと理解される。いずれも清力美術館本に欠くことのできない場面ではある。しかし、二図として別々にえがくことも可能である。あえて貼りかさねの手法をとっていることには、一種の遊戯性が感じられる。これによって、画巻をひろげてゆく行為自体に一層の楽しさが付与されている。そこには、序文や詞書を草した人物と絵師とが、相図って構想を練ったよ

うすが想像される。清力美術館本を制作すること自体が、かれらの余暇の楽しみであったと推察される。

五、登場人物

清力美術館本にえがかれた人物のなかで、付箋によってその名を特定することのできるのは、戸田熊次郎、中島文叔、高原乙次郎、高原信太、賢斎、黒岩隆琢、梯豊太、武藤弥兵衛、狩野勝波の九名である。ほとんどの人物について、くわしいことはわからない。付箋は、かれらの役職について、戸田熊次郎と梯豊太は久留米藩の目付役、黒岩隆琢は医師と記す。

賢斎をのぞく八名の名がそろって掲載される「弘化三年手鑑」(註一八)によると、戸田熊次郎が御目付、黒岩隆琢、中島文叔、狩野勝波は御医師、高原乙次郎は明善堂御目付、高原信太は御蔵所御目付、梯豊太は奥祐筆助、武藤弥兵衛は中小姓とある。記載のない賢斎の関連では、付箋九にかれの兄と記す平木碩斎が御医師として記録されている。

付箋八が梯豊太を目付役とした典拠はあきらかではないが、「弘化三年手鑑」に記された経歴からすると、清力美術館本にえがかれた帰国差留め事件の天保十年(一八三九)までには、かれらのほとんどが「弘化三年手鑑」に記載される役職にあったと推察される。

このなかで、御医師に列する狩野勝波は、久留米藩御抱え絵師。代々の御抱え絵師の家に生まれ、文政七年(一八二四)頃から徳川幕府の御絵師狩野伊川院栄信、晴川院養信にまなんだ。天保十年頃の江戸滞在は、『久留米藩御用絵師絵画資料目録』に報告される画稿の留書から、天保七年(一八三六)十二月から天保八年(一八三七)二月、天保九年(一八三八)三月、天保十年(一八三九)十一月、天保十二年(一八四一)五月、天保十三年(一八四二)九月、天保十五年(一八四四)四月が確認される(註一九)。

ここに記された年月の間に、帰国があったのか、連続して滞在したのかはわからないが、かなり長期にわたって江戸に滞在したと推察される。

年齢のわかる人物もすくないが、『久留米人物誌』（註二〇）によると、戸田熊次郎は明治十五年（一八八二）歿、享年七十八、梯豊太は嘉永二年（一八四九）歿、享年四十二、狩野勝波は明治二年（一八六九）歿、享年六十五。たとえば天保十年（一八三九）に、戸田熊次郎三十五歳、梯豊太三十二歳、狩野勝波三十五歳である。壮年期を迎えた同世代のひとびとである。

このほか、付箋一に戸田熊次郎が和漢の学に通じ詩類を能くしたこと、さきにもふれたように付箋八には梯豊太の書を能くしたことを記す。

戸田熊次郎は『米府年表』の編纂などによって、筑後においては夙に知られた人物である。『久留米人物誌』によると、漢詩を梁川星巖、歌道を香川景樹、井上文雄、西田直養にまなび、かの『米府年表』をはじめとして『藤蔭歌話』、『万葉集愚考』、『滄州隨筆』など、その著作は二十余巻におよぶという。このほか『久留米人物誌』は、梯豊太を橘守部門下の歌人、付箋八が豊太の兄弟とする浅田達二も橘守部の門下で歌をよくし、著に「烏他廻馬機」があるとする。また、梯豊太の妻以登も和歌に秀でたとし、中島文叔の妻浅子を歌人としている。

さらに、『久留米人物誌』は狩野勝波について、江戸にあるとき、田川鳳朗門に入り、俳諧をよくするとする。その典拠『筑後俳諧史』（註二一）の小伝には、鳳朗門に入り、交遊少なからずと記され、『筑後人物便覧』（註二二）にも絵師であり俳人とも記す。これらのほか、『久留米人物誌』や『筑後俳諧史』にはみえないが高原乙次郎が橘雨、中島文叔が琴凌と号して俳諧をたしなみ、彩雨、残屋と号した同輩もいたことは、詞三に記すところである。

清力美術館本が、戸田熊次郎の序文にはじまり、かれの漢詩や高原乙次郎、中島文叔、狩野勝波の句をおりこんでいるのも偶然ではない。清力美術館本は、文芸をたのしみとしたひとびとの手すさびの産物である。そして、戸田熊次郎が江戸勤番のくらしぶりや折々の感興をつたえたいとねがったのも、文芸の愛好とともにする故郷のひとびとであったにちがいない。日常の雑然とした諸場面をあつめて織りだされた清力美術館本の成立に、文芸はなくてはならない緯糸であったといえよう。その意味では、清力美術館本は当時の筑後文化の一面を示唆する作品である。

六、題材と表現

絵師がみずから目にし、実際に遭遇したところ、あるいはその時の絵師自身の姿をえがきとめることは、十九世紀においてはすでに稀ではない。たとえば渡辺華山「一掃百態」、「客参録」、「牢中縮図」(註二二)、狩野晴川院『公用日記』や「江戸名所真景」(註二四)、尾崎石城「石城日記」(註二五)などをあげることができる。しかし、これらは直ちに本絵とはならない。

武士の日常生活を題材とすること、画卷形式の作品であることからすると、比較的近似する作例として、画稿として伝存する福岡藩御抱え絵師石里洞秀の幼弱壮強艾耆老耄期頤図をあげることができる(註二六)。これは、当世の武士の幼年から最晩年までの生活の、いわばかくあるべきありようを、年代ごとにえがいた画卷である。この作品は、現在する画稿の描法から、謹直な筆法で細部まで丁寧なえがいていたとかんがえられる。

これまでに確認されている狩野勝波の遺作のほとんども、狩野派においてかきつがれていた和漢の画題を、さきの石里洞秀の例

で推測したと同じように、安定した技術と格調のそなわる狩野派の描法によってえがいたものとかんがえられる（註二七）。『久留米藩御用絵師絵画資料目録』に収める画稿も、遺作と同じ傾向にあるとおもわれる。

しかし、清力美術館本に生彩をあたえているのは、略筆風の描法によって平俗性と軽快感をあたえられた人物たちである。さきにあげた渡辺華山などの例にちかい。このいかにも対象のありのままを即座に写しとったとおもわせる略筆風の描法を本絵の表現方法として採用した勝波の工夫は何に由来するものであろうか。

『久留米藩御用絵師絵画資料目録』の勝波の画稿中に、英一蝶画の写し五点がふくまれている。文政七年（一八二四）の人物風俗画卷、天保十年（一八三九）の節季候図、天保十一年（一八四〇）の旅装人物図、嘉永三年（一八五〇）の向獅子図と鞘鉄砲図である（註二八）。これらは戯画をふくむ風俗画的作品の写しであり、原画の描法も謹直、細密ではなく略筆風であったと推察される。『久留米藩御用絵師絵画資料目録』の画稿の総数はおよそ一万点。一蝶の名は二十二点にみえ、そのなかで年紀を有するものは八点、模写した絵師名を記すもの十一点である。そのうちの五点であるから、数は少ないが、勝波が天保年間前後に一蝶画に強い関心を示したことをうかがうには足りよう。

『米府年表』享保四年（一七一九）の条は、久留米藩から一蝶へ扶持がくだされたとつたえ、『古画備考』は一蝶から久留米侯への次男百松召し抱えの願書があったとつたえる（註二九）。久留米藩と一蝶はふかい縁のあった可能性もあり、狩野宗家の安信にまなんだ絵師であり、暁雲という俳号をもち、蕉風の俳諧をよくし、芭蕉著賛の作品ものこす一蝶は（註三〇）、勝波にとって慕わしい先輩であったに違いない。四季日待図巻など特定の作品の影響は想定できないが、略筆風の描法や、諧謔や情感をもちこんだ風俗描写に関して、勝波が一蝶画の示唆をうけたことは十分かんがえられる。

あるいは、一蝶画にかぎらず、ひろく俳諧にかかわる絵画との関連も考慮すべきかもしれない。序文にいう蕉翁の跡とは、勝波にとつては芭蕉の絵画をふくむものであったともかんがえられる。芭蕉はその画技を、狩野安信門葉の許六にまなんでいる（註三一）。芭蕉の絵画は、狩野派にその源がある。芭蕉自画賛の白眉とされる「あかあかと」発句自画賛に付属する、狩野安信の高弟狩野昌運の門葉鯉屋杉風の添状には「絵もかるがる出来たる也」と記される（註三二）。専門の絵師がかかるという画趣をあらわすには、略筆風にえがくにしくはなく、簡略な賦彩をとるにしくはない。

また、狩野昌運は、幕府の御番医師で、のちに貞門の五俳哲のひとりにあげられる半井卜養の『卜養狂歌』に画を付しており、その画のなかには略筆風の描法でえがかれた当世人物もふくまれる（註三三）。つまり狩野派の絵画のなかには俳諧、狂歌に似つかわしい表現としての略筆風の描法があり、勝波は俳諧に親しむことによって、これを再認識したのではなかっただろうか。文芸が勝波を、かれ自身にとつての新しい試みへと導いたのではなからうか。

七、江戸東京博物館蔵久留米藩士江戸勤番長屋絵巻と清力美術館本

はじめにふれたように清力美術館本と基本的な図様を同じくする作品として江戸東京博物館の久留米藩士江戸勤番長屋絵巻がある。銘文も、江戸東京博物館本において清力美術館本の詞二の部分が空白であるほかは、仮名の表記や改行の位置にちがいもあるが、同文である。ただし、清力美術館本の付箋部分が江戸東京博物館本では直接本紙に記されている。このことから、清力美術館本が先行することはあきらかであり、江戸東京博物館本は明治時代にはいつてのちの写しである。

絵の部分の大きな相違点は、絵二において、清力美術館本は連子窓を一面にのみえがき、画面右端に懸物の表具をわずかにみせるが、江戸東京博物館本では窓が部屋の上二側面にえがかれ、懸物もほぼ全体をみせ、画題が神農図とわかること、絵六、七、八、十一、十二、十三において江戸東京博物館本では画面上端に霞をひいていることである。これらは、江戸東京博物館本の料紙の天地幅が三一・四糎と、清力美術館本より五糎ほど広いことに起因するとかんがえられる。江戸東京博物館本の絵師は、より広い範囲をえがきこむか、霞によって余白をうめるかの撰択をせまられたのである。絵一の子神農図は、この部屋の主中島文叔が医師であることを知る江戸東京博物館本の絵師の機知にとむ加筆であろう。

このほか、江戸東京博物館本では、庭の植物の一部分や茶釜の湯気をえがかないなど、清力美術館本において執拗ともおもわれた細部の描写に省略がみられる。あるがままをつぶさにえがきとめようとした清力美術館本と、おそらくは題材のおもしろさによってつくられた模本の違いは明瞭である。また江戸東京博物館本において人物の頭体の均衡が整えられている点、比較的澄んだ色彩をもちい、衣の彩色における濃淡が自然な量かしによってあらわされている点に、清力美術館本との制作時期の隔たりを確認することができる。

江戸東京博物館の久留米藩士江戸勤番長屋絵巻がその風俗描写への関心からしばしばとりあげられているように、これまでのところ、このような地方の藩の武士たちの江戸勤番生活における余暇の過ごし方ともいうべき題材を絵画化した類例はみいだせない。清力美術館本は、武士の日常をえがく画卷として貴重な事例である。それとともに、清力美術館本はこれまで述べたように、狩野派の御抱え絵師の公務をはなれた画事として、文芸とつよくむすびついた制作として、また狩野派のもつ多様な表現の可能性をう

かわせる作例としても留意すべき作品である。

註一 岸田勉「調査概要」『久留米藩御用絵師絵画資料目録』久留米市教育委員会 一九八一年

註二 一、原史彦「久留米藩士江戸勤番長屋絵巻」、「悠々江戸暮らし—久留米藩士江戸勤番長屋絵巻解説」『東京人』第八八号 財

団法人東京都文化振興会 一九九五年

二、山本博文『参勤交代』講談社 一九九八年

三、井上敏幸「武士が支えた風雅の道」 週間朝日百科 世界の文学 日本Ⅱ 朝日新聞社 二〇〇一年

四、青木直己『幕末単身赴任 下級武士の食日記』生活人新書 一六五 日本放送出版協会 二〇〇五年

註三 『久留米藩御用絵師絵画資料目録』目録番号二〇四七「江戸勤番絵巻」

註四 一、『久留米市史』第二巻 第二二一図 久留米市史編さん委員会 一九八二年

二、『御用絵師』第六八二図 福岡県立美術館 一九八七年

註五 有馬家文書六四六七 『有馬家文書目録』第二集 久留米図書館 一九七八年

註六 戸田乾吉『久留米小史』巻之十八 宮原直太郎発行 一八九五年

註七 「武士が支えた風雅の道」(註二の三) 参照

註八 戸田信一(熊次郎)『米府年表』久留米市役所 一九三二年

註九 「改正芝金杉三田白銀辺図 全」(江戸切絵図集成第二巻 中央公論社 一九八二年)などを参照

大川市立清力美術館の江戸勤番之図(小林)

一二九七

- 註一〇 『幕末 写真の時代』第一六二図 フェリクス・ベアト撮影 小沢健志編 筑摩書房 一九九四年
- 註一一 『江戸の泥絵展』第一五〇、一七二図 日本美術館企画協議会 一九七七年
- 註一二 『久留米市史』第二卷（註四の一） 第一九四図
- 註一三 国立国会図書館蔵本参照
- 註一四 慎徳院殿御実紀卷二（『続徳川実記』第二編 新訂増補国史大系 吉川弘文館 一九九一年）天保十年四月の条
- 註一五 『米府年表』（註八）天保十年四月、八月の条
- 註一六 小林忠『英一蝶』第七、六三図 至文堂 一九八八年
- 註一七 禁裡郭公図屏風は『御用絵師』（註四の二）第一〇図、四季日待図巻は『英一蝶』（註一六）第六三図を参照
- 註一八 鶴久二郎編『久留米御家中分限帳』下 一九七五年
- 註一九 拙稿「三谷家略年譜―久留米藩お抱え絵師史料」福岡大学人文論叢第二十六卷第二号 一九九四年
- 註二〇 篠原正一編 久留米人物誌刊行委員会 一九八一年
- 註二一 竹下工著・発行 一九二九年
- 註二二 筑後史談会 一九三五年
- 註二三 鈴木進・尾崎正明『渡辺華山』（日本絵画全集二四 集英社 一九八〇年）などを参照
- 註二四 松原茂『画家・文人たちの肖像』第五八、五九図 至文堂 一九九八年
- 註二五 大岡敏昭『幕末下級武士の絵日記』相模書房 二〇〇七年

註二六 『尾形家絵画資料目録』目録番号四四四〇 福岡県文化会館 一九八五年

註二七 拙稿『三谷家の絵師』『久留米市史』第十三卷 久留米市史編さん委員会 一九九六年

註二八 『久留米藩御用絵師絵画資料目録』目録番号一〇五一（人物風俗画卷）、一九一三（節季候図）、四四二八（旅装人物図）、一三三三（向獅子図）、一九二二（鞘鉄砲図）

註二九 朝岡興禎著・太田謹増訂『増訂古画備考』四十四 英流 思文閣 一九七〇年

註三〇 一、『英一蝶』（註一六）参照

二、『芭蕉全図譜』芭蕉全図譜刊行会 一九九三年

註三一 『増訂古画備考』（註二九）十二 詩歌連俳茶香雜 芭蕉庵桃青ならびに許六の項

註三二 一、『芭蕉全図譜』（註三〇の二）第二一〇五図解説参照

二、『増訂古画備考』（註二九）十二 詩歌連俳茶香雜 杉風の項

註三三 『卜養狂歌絵巻』日本古典文学影印叢刊三〇 財団法人日本古典文学会 一九八五年

附記、本稿が成るにあたり、大川市教育委員会、大川市立清力美術館館長吉武美津子氏、柳川藩主立花家資料室御花史料館植野かおり氏、江戸東京博物館市川寛明氏にさまざまな御高配をいただきました。また掲載の写真も植野かおり氏の撮影です。心より御礼申し上げます。